世帯と家族の諸様相

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4788

世帯と家族の諸様相

亀　井　哲　也

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　人口と世帯数
Ⅲ　世帯・家族の形態
Ⅳ　世帯・家族と婚姻
Ⅴ　世帯・家族の機能
Ⅵ　おわりに

Ⅰ　はじめに

本稿の目的は、鍋谷という集落における世帯・家族というものが、どのようなものであるかを明らかにすることである。そのために本稿では、『鍋谷史』に記載されている昭和30年における資料[1)]と、今回の調査で得られた昭和61年における資料をもとに、以下のような手順で鍋谷における世帯・家族の諸様相を記述し、考察していこうと思う。

まずⅡでは、人口と世帯数の減少という事実に触れ、その原因について考える。次にⅢでは、世帯・家族の形態に注目し、昭和30年と昭和61年の各世帯の家族タイプと成員数という面から、その変化について考察する。Ⅳでは、世帯・家族を構成している個々の成員に着目し、特に成員の婚姻に関することを述べる。Ⅴは、世帯・家族の機能と題し、まず鍋谷の内部において「イエ」というひとつの単位がどのような働きをし、イエやムラとどのような関わりを持っているかを述べ、次にイエの中で個々の成員がどのような役割を担っているかについて述べる。

本論に入る前に、「世帯」・「家族」という言葉について若干の説明をすると、世帯という言葉は、イエの居住による結びつきを強調したものであり、家族という言葉は、イエの血縁や婚姻による結びつきを強調したものであるといえる。本稿では、その論点となるところに従って、この2つの言葉を使いわけていこうと思う。

Ⅱ　人口と世帯数

表－1にみられるように、鍋谷の人口・世帯数は大正時代あたりをピークに増加し、その後はほぼ横ばいとなり、昭和30年代以降漸減している。この減少は、昭和30年代からのエネルギーの変換により従来の主生業であった薪炭業が衰退してしまったことなどの理由で、鍋谷の人々が職

を変えざるをえなくなり、鍋谷の外へ働き口を求めて転出していったことに原因があるように思われる。この当時、鍋谷には服部鉱山以外に主な職場はなかった。また、交通の便も現在のように各世帯に自家用車があったわけでもなく、非常に悪かったといえる。このように、鍋谷にとどまっていてはなかなか雇用の機会に恵まれなかったという状況もあり、人々は現金収入を得られる職を求めて転出していったのである。転出は、ひとつの世帯がその成員全員でという場合もあれば、その世帯の働き手だけがという場合もあった。

年　代	世帯数	人　口	備　考	
天明 5年（1785）	78	351	村鑑より	○
天保 13年（1842）	63	341	家立当時	○
明治 5年（1873）	116	568	戸籍法制定	○
〃 9年（1876）	113	566	皇国地誌より	○
大正 9年（1920）	138	714	国勢調査	○
〃 14年（1925）	137	662	〃	※
昭和 5年（1930）	127	629	〃	○
〃 21年（1946）	127	643		※
〃 24年（1949）	127	634		○
〃 30年（1955）	127	675	世帯表より	○
〃 40年（1965）	109	460	国勢調査	※
〃 50年（1975）	98	427	〃	※
〃 61年（1986）	90	402	1986. 5. 30 現在	

○『鍋谷史』より
※『辰口町史』P 898より

表－1　世帯数と人口の推移

ここで特筆すべきことは、現在鍋谷にある90世帯の中にひとつもこの30年間に転入してきた世帯がないことである。この90世帯のすべてが、『鍋谷史』にある昭和30年の資料の127世帯と連続しているのである。そして、このような一方的な転出が、30年間で41世帯・273人もの減少という状況をもたらしたのである。

表－1の昭和30年と昭和61年の人口・世帯数に注目し、それぞれの減少率を出してみると、人口は40.4％の減少率となり、世帯数は32.3％の減少率となる。この減少率の差はどのような理由から生じたのであろうか。次のⅢでは、この理由をまず、家族・世帯の形態面から考えてみようと思う。

Ⅲ　世帯・家族の形態

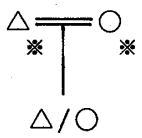
人口の減少率と世帯の減少率に差が生じた原因としては、まずはじめに、家族の形態そのものが変化したために、人口の減りかたほどには世帯の数が減っていないという考え方ができるだろう。また、家族の形態そのものには変化はないが、その成員の数が減少したためにこのような差が生じたという考え方もできるだろう。以下では、資料を提示しながらこの差が生じた理由を考えつつ、鍋谷の家族の形態とその変化を考察していこうと思う。

1. 家族のタイプ

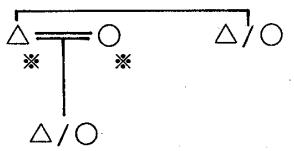
まず実際に鍋谷の家族の形態そのものが、昭和30年から昭和61年の間に変化したのかどうか、以下のように各世帯を分類して考えていこうと思う。

はじめに、核家族と直系家族という２つの基本となるタイプに分類し、それぞれＡ１，Ｂ１と表記する。この２つのタイプを基本として、既婚者と同世代の者、すなわち兄弟姉妹と同居している場合にはＡ２，Ｂ２と表記する。また直系家族タイプの場合、基本の３世代よりも上の世代の成員がいる場合には＋ｄをつけて表わす。さらに、こういった基本タイプにおいて成員の一部が欠損している場合には、ダッシュ（′）をつけて表記する。これを図示すると図－１のようになる。

Ａ１：核家族タイプ

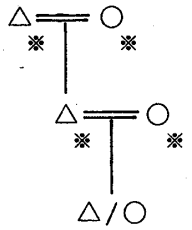


Ａ２：核家族＋同世代ｄタイプ

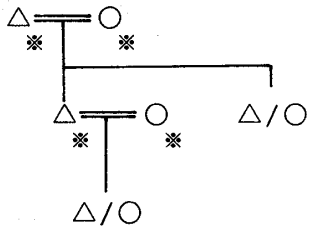


○Ａ１、Ａ２タイプの場合、※印のついたいずれか一方の成員がいない場合は、欠損タイプとなり、Ａ１′、Ａ２′と表記する。

Ｂ１：直系家族タイプ

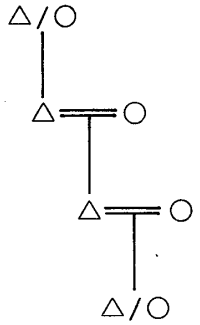


Ｂ２：直系家族＋同世代ｄタイプ



○Ｂ１、Ｂ２タイプの場合、３世代家族の形を残したままで、※印のついたいずれかの成員（複数でも可）がいない場合は欠損タイプとなり、Ｂ１′、Ｂ２′と表記する。

Ｂ１＋ｄ：直系家族＋上の世代ｄタイプ



○このタイプの場合、２世代目以降の家族の構成員によってＢ１＋ｄ、Ｂ１′＋ｄ、Ｂ２＋ｄ、Ｂ２′＋ｄとなりうる。

図－１　家族タイプの例

このような分類方法を用いて、昭和30年と昭和61年の鍋谷の全世帯の家族タイプを分類すると表－２のようになる。

S61＼S30	A1	A1′	A2	B1	B1′	B2	B2′	B1+d	B1′+d	B2+d	ひとり暮し	分類不可	計
A1	11	2		1	4		1		1				20
A1′	1	1		1									3
A2	1				1								2
B1	3		1	3	9	1	3					1	21
B1′	7	1		6	5	1	2			1		1	24
B2	1						1						2
B2′	1			1									2
B1+d						2	1						3
B1′+d						1							1
B2′+d					1								1
ひとり暮し	2	1	1		2							1	7
分類不可	1	1			2								4
転出・消滅	13	4		9	6	2	2	1			2	2	41
計	41	10	2	21	30	7	10	1	1	1	2	5	131 ※

表－2　家族タイプの昭和30年から昭和61年への変化

※　昭和30年の世帯数は127世帯であるが、この30年間に4世帯が鍋谷内に分出しているため131世帯となっている。（『鍋谷史』世帯表および昭和61年の調査より作成）

表－2から、昭和30年と昭和61年それぞれの核家族タイプのグループ（Aグループ）と、直系家族タイプのグループ（Bグループ）の全世帯に占める割合を求めると、昭和30年のAグループの割合は39.4％、Bグループの割合は55.1％となり、また昭和61年の場合は、Aグループが27.8％、Bグループが60.0％という割合になる。昭和30年も昭和61年も、Bグループの占める割合のほうが、Aグループの割合よりも大きく、鍋谷の家族タイプが核家族化している傾向はなく、むしろ直系家族化する傾向が強いといえる。現在、Aグループに入っている世帯であっても、第1世代であったものが死亡したために核家族タイプとなった世帯の場合、直系家族タイプへの変化の途中とみなしうるわけで、純粋に核家族化したといえる世帯はごく少数である。つまり、鍋谷の家族の形態そのものが変化したということはないのであり、家族タイプが直系家族タイプから核家族タイプへ変化したために、人口の減少率と世帯数の減少率に差が生じたと考えることはできない。

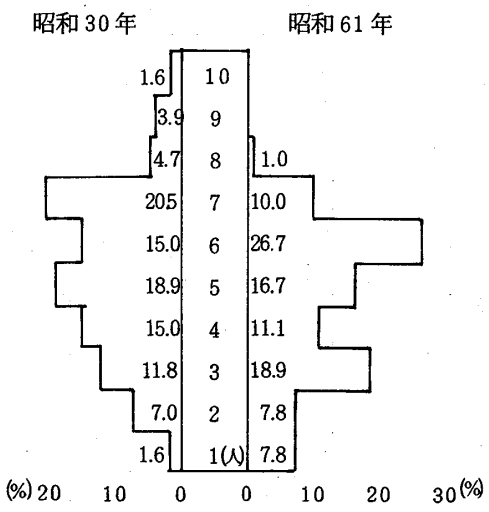
また、鍋谷の人々の意識の上においても、核家族タイプよりも直系家族タイプの家族のほうが望まれており、家族の形態においては、鍋谷の人々の考えている家族のあり方と現状が一致しているといえる。

2. 一世帯あたりの成員数

一世帯あたりの成員の数が減少したと考えることでも、先に述べた差が生じた理由を説明することができる。鍋谷の各世帯の成員数を調べた結果を表とグラフにすると、表－3、図－2のようになる。

成員数＼資料年代	昭和30年	昭和61年
1 人	2世帯（ 1.6%）	7世帯（ 7.8%）
2	9 （ 7.0 ）	7 （ 7.8 ）
3	15 （ 11.8 ）	17 （ 18.9 ）
4	19 （ 15.0 ）	10 （ 11.1 ）
5	24 （ 18.9 ）	15 （ 16.7 ）
6	19 （ 15.0 ）	24 （ 26.7 ）
7	26 （ 20.5 ）	9 （ 10.0 ）
8	6 （ 4.7 ）	1 （ 1.0 ）
9	5 （ 3.9 ）	― （ ― ）
10	2 （ 1.6 ）	― （ ― ）
計	127 （100.0 ）	90 （100.0 ）

表－3　成員数別世帯数



図－2　成員数別世帯数の百分率によるグラフ

（『鍋谷史』世帯表および昭和61年の調査より作成）

表－3、図－2より、昭和30年と昭和61年の各々の時点での一世帯あたりの平均的成員数をみると、そこにはだいたい1人分のひらきがあるといえる。

ここで、家族のどの成員が減少したのかを考えてみる。家族タイプにおいては、直系家族の占める割合が昭和30年も昭和61年も大きいということは前に述べた。すなわち、祖父母・父母という第1世代・第2世代には変化がないということである。それゆえに、減少したと考えられるのは第3世代だけである。核家族タイプの世帯ならば、第2世代の者が減少したと考えられる。つまり、家族を構成する成員のうち、子供の世代が減少しているのである。このことは、図－2のグラフの7～10人の部分にあらわれているといえる。

成員数の減少の理由はもうひとつ考えられる。それは図－2のグラフの1～3人あたりの部分にあらわれているものである。核家族タイプの世帯の中でも、子供のいない世帯の増加と、ひとり暮しの世帯の増加がここにあらわれているのである。昭和61年のA1タイプ20世帯のうち、7世帯が夫婦のみという成員数2人の世帯である。そしてその7世帯のすべてが、老夫婦からなる世帯である。またひとり暮しの世帯も7世帯ある。そしてこの14世帯21人はいずれも50歳代後半以上の人々なのである。この14世帯のほとんどの場合が、昭和30年の時点では子供と同居していた。つまり、この14世帯は、子供たちが個人単位で鍋谷から転出してしまい、戻ることなく鍋谷の外でイエを構えて、親たちだけが鍋谷にとどまっている世帯なのである。

また、一世帯あたりの成員数が減少しているという傾向は、表－4からもわかる。表－4は一世帯あたりの成員数の昭和30年から昭和61年への変化を、世帯数でみたもので、現在鍋谷にある90世帯についてその変化をたどっている。

表－4よりわかることは、90世帯のうち、成員数が増加しているのは22世帯（破線の下部）、減少しているのは57世帯（破線の上部）、変化していないのは11世帯（破線上）ということである。90世帯のうち63.3%もの世帯が、30年間でその規模を縮小しているのである。

S61＼S30	1(人)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
1(人)		1	1	1		1	2		1		7
2			3		1		2		1		7
3		2	2	3	3	3	2	1		1	17
4			1		2	2	1	3	1		10
5			2	3	3	3	4				15
6		1	1	3	3	4	8	2	2		24
7					4	2	2	1			9
8										1	1
9											0
10											0
計	0	4	10	10	16	15	21	7	5	2	90

減少
増加

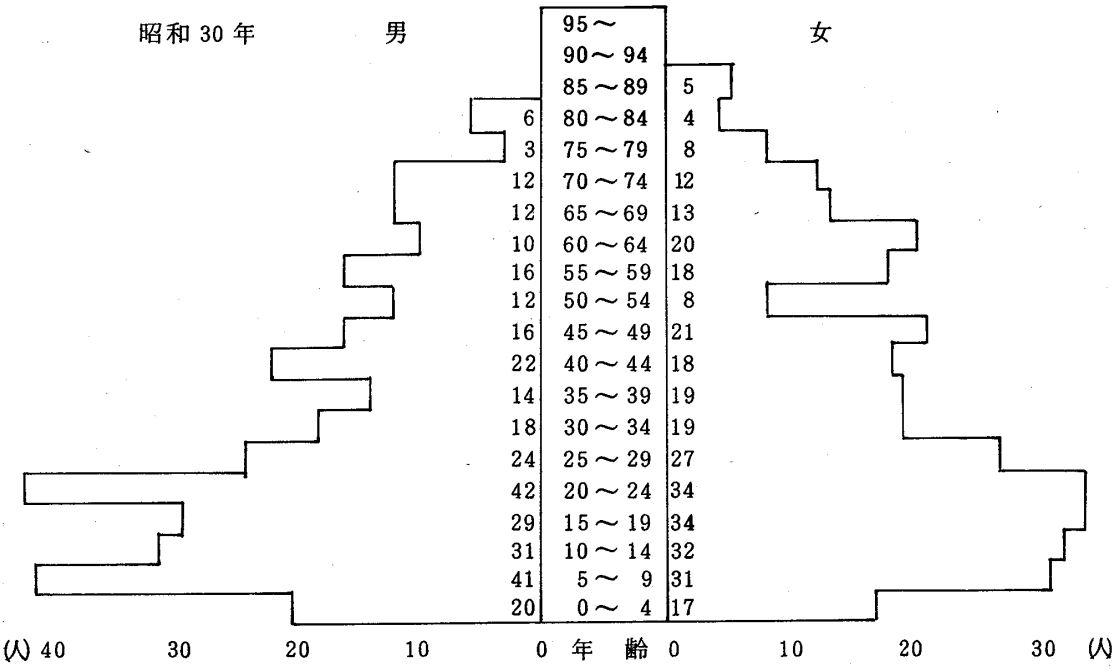
表－4　家族数別世帯数の昭和30年から昭和61年への変化

（『鍋谷史』世帯表および昭和61年の調査より作成）

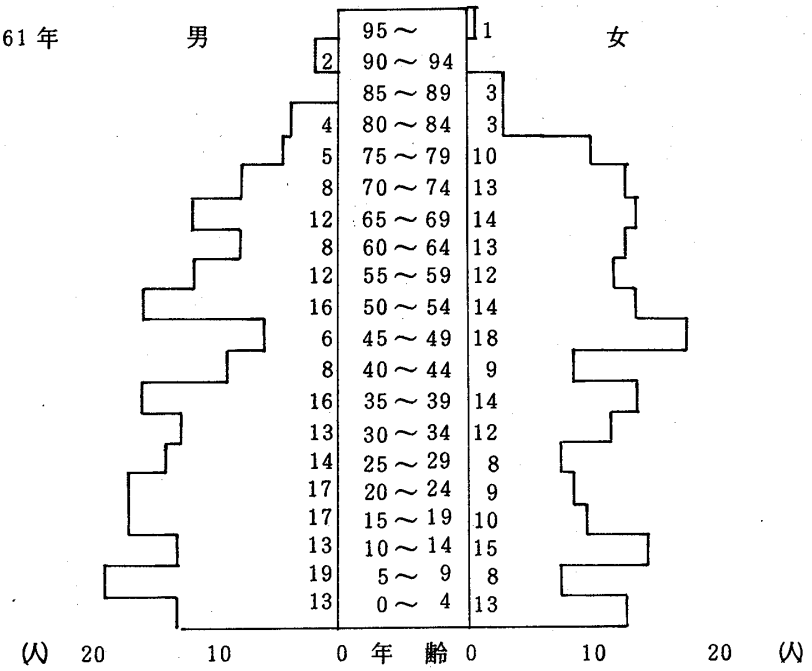
以上から、Ⅱで述べた人口の減少率と世帯数の減少率の差というものは、鍋谷全体の傾向としての成員数の減少、すなわち、子供の数の減少と、老人で構成されるひとり暮しや夫婦のみの世帯の増加ということに、その差が生じた原因があると考えられる。後者の原因は、前に述べた鍋谷の人々が理想としている直系家族タイプの世帯像とは食い違っている。このような世帯が現在あるのは、昭和30～40年代あたりに顕著にみられた青年層の個人単位での転出という傾向において、そのイエを継承すべき者までも転出してしまったことに原因があると思われる。今日ではこのような傾向はあまりみられず、イエを継承しようとする者、継承すべき者は鍋谷にとどまる傾向にあるので、こういった世帯は昭和30～40年代のしわよせとみなすことができ、一世帯あたりの成員数の減少の一因になっているものの、家族の形態そのものを変化させているとは考えられない。

ここで図－3をみてみると、30年間に41世帯、173人も減少しているというのに、老人の人口比が突出していないことがわかる。これによって、鍋谷における年齢層のバランスが崩れていないということがいえるとともに、家族の形態そのもののバランスも崩れていないということがいえるであろう。

現在の鍋谷における世帯・家族の形態の平均的な姿は、祖父母の両方ないしどちらか一方と、父母、それに子供1～3人という直系3世代同居である。もちろん、ここにある子供の数は、夫婦一組の子供の平均数というわけではなく、あくまでもある時点での、その夫婦の子供の数



（『鍋谷史』世帯表より）



（昭和61年5月30日現在）

図－3　昭和30年、昭和61年における年齢別人口構成

であることは留意されるべきである。そして、鍋谷の人々が望んでいる世帯・家族の形態も、直系3世代同居という直系家族タイプであり、これは鍋谷の平均的な世帯・家族の形態と一致しているのである。

Ⅳ　世帯・家族と婚姻

ここでは、世帯・家族を構成する個々の成員が、この30年間の婚姻の変化によってどのような変化をみせたかということについて述べる。

まずはじめに、男性成員に関して述べる。鍋谷においては、イエは長男が継承することが普通であると考えられており、一般的にも長男がイエを継いでいる例が多い。イエを継承しない次男以下の男性はショタイデ[2)]を構えるわけであるが、表－1からわかるように、鍋谷の世帯数は大正9年以降増えておらず、すべての者が鍋谷内に分家するとは限らないといえる。鍋谷史の昭和30年の資料の時点で、世帯主がその世代で分家したと目される世帯は20世帯足らずであり、この30年間で新たに鍋谷内に分出したショタイデは4世帯のみである。このように、イエの継承や分出に関することは、昭和30年と昭和61年のどちらにも同様にあてはまることであるといえる。ただし、前述したイエを継承すべき男性成員が転出してしまった世帯はこの限りではない。

次に女性成員について述べる。女性に関しては、この30年間にかなりの変化があったといえる。現在鍋谷に居住している既婚女性たちの出身地を年齢別にみると、表－5のようになる。また昭和30年と昭和61年の時点での既婚女性の出身地別人数を出し、さらに昭和61年における既婚女性の、鍋谷への婚入時期を昭和30年前と後に分けて、その出身地別の変化をみると、表－6のようになる。

この表－5、6をみると、鍋谷出身の既婚女性が多いことに気づく。昭和30年の資料においては、192人中103人、53.7％となっており、また昭和61年の資料においても144人中49人、34.0％となっている。鍋谷の中での内婚が多いといえる。けれども、昭和61年の資料のうち、昭和30年以前に婚姻関係を結んだ者と、それ以後に婚姻関係を結んだ者を比較してみると、昭和30年以後に婚姻関係を結んだ者の中で、鍋谷出身の女性は68人中13人となり、19.1％を占める程度である。

こういった数字から考えて、昭和30年頃までは鍋谷内での通婚が一般的であったといえるだろう。現在38歳の女性の例が、鍋谷内での通婚の最後の例で、この女性より若い人では鍋谷内での通婚はみられない。現在では、鍋谷外の人との通婚が一般的なようである。

このような変化が起こった理由として考えられるのは、まず、生業の変化の影響ということである。鍋谷内で成立しえた薪炭業などが衰退したことにより、若年層の者が鍋谷の外へ働きに出るようになり、外部との接触の機会が増加し、結婚相手を得る範囲が広くなったと考えることができる。また高等教育の機会が増えたこともその範囲の拡大の一因といえる。さらには、人々の結婚相手を選ぶ基準が変化したことも理由となりうるであろう。これは、地域の中でのみ婚姻関係を結ぶことによる欠点への批判の反映である。現在の鍋谷の人々は、鍋谷の中の人よりも、鍋谷の外の人との婚姻を望んでいる[3)]。

鍋谷出身の女性がどのような地域に婚出しているかの統計的資料はないが、近郊の市町村へ多

出身地 / 年齢	鍋谷	※辰口町	+小松市	能美郡 石川郡 加賀市	金沢市 松任市	その他の県内	県外	不明	生立 養女	計
95歳以上	1									1
90～94										0
85～89	2								1	3
80～84		1		1					1	3
75～79	5	2					1		2	10
70～74	7			2	1				3	13
65～69	6		3	3	1		1			14
60～64	6	3		2					1	12
55～59	4	3					2	1	2	12
50～54	8	2		1	1				2	14
45～49	6	2	4	2			2		2	18
40～44	3	2	2	1					1	9
35～39	1	2	3	3		1	2		2	14
30～34		2	5	1			1	2	1	12
25～29		1	1		1	1		1	2	7
20～24			1	1						2
計	49	20	19	17	4	2	9	4	20	144

表－5　現在鍋谷に居住している既婚女性の年齢別出身地

※…鍋谷を除く
＋…辰口町を除く

資料年代 / 出身地		鍋谷	※辰口町	小松市	能美郡 石川郡 加賀市	金沢市 松任市	その他の県内	県外	不明	生立 養女	計
昭和30年		103人 (53.7%)	20 (10.4)	11 (5.7)	18 (9.4)	6 (3.1)	2 (1.0)	9 (4.7)	8 (4.1)	15 (7.8)	192 (100.0)
昭和61年	全体	49 (34.0)	20 (13.9)	19 (13.2)	17 (11.8)	4 (2.8)	2 (1.4)	9 (6.2)	4 (2.8)	20 (13.9)	144 (100.0)
	昭和30年以前に婚入した女性	37 (49.3)	10 (13.3)	3 (4.0)	8 (10.7)	2 (2.7)	0 (0.0)	4 (5.3)	0 (0.0)	11 (14.7)	75 (100.0)
	昭和30年以後に婚入した女性	12 (17.4)	10 (14.5)	16 (23.2)	9 (13.0)	2 (2.9)	2 (2.9)	5 (7.3)	4 (5.8)	9 (13.0)	69 (100.0)

※　鍋谷を除く
＋　辰口町を除く

表－6　既婚女性の出身地の変化（昭和30～61年）

（『鍋谷史』世帯表および昭和61年の調査より作成）

く婚出する傾向があるようである。また、入婿の場合も、昔は鍋谷内の人が多かったが、現在では鍋谷の外の人が入婿となるという話である[4]。

現在、鍋谷において嫁の来手がなくて困るということはない[5]。過去において、鍋谷内での通婚が一般的であったことは、他の地域からの嫁の来手があまりなかったためなのだろうか、それとも、他の地域の女性よりも鍋谷の女性のほうが配偶者として望ましいと思われていたためなのだろうか。昔の鍋谷は冬になると雪に閉ざされ、交通の便があまり良くなかったといえる。また人々の生活も地域内を主な就労の場とする農業や林業などに依存するところが大きかった。現在の鍋谷は、除雪体制の確立によって冬期も他地域と隔絶されることはなくなり、通勤通学の足も常時確保されている。また小松・金沢といった都市に就労することにより、安定した収入を得るようになった。こういった鍋谷を取り囲む社会的状況の変化によって、鍋谷に他地域の女性が婚入しやすくなったということはいえるであろう。しかし、鍋谷内での通婚が一般的であった理由を、人々のことばから知ることはできなかったので、ここではその結論を導くことはできない。おそらくは、先の2つの考え方の両方が理由であったのであろう。

以上のように、現在鍋谷において、世帯・家族へ婚入している女性は、鍋谷の外の人々である。このことは、世帯・家族の中に何らかの変化をもたらしたであろうか。次のVでは、世帯・家族の機能の面からこのことを含めて記述する。

V　世帯・家族の機能

鍋谷において、イエというものは、その社会生活・経済生活の上でひとつの単位となっている。イエと世帯は、日常的には同じ単位と考えられるが、イエは通時的なもので継続されるという理念があるのに対し、世帯はあくまでもある時点での単位であるところが違っている。なお鍋谷の場合、イエは他のイエから一定の呼称をもって呼ばれ、かつては一定の指標（タワラジルシ[6]）によって区分されていた。一定の呼称とは屋号（ヤゴウ）のことである。これはイエごとにつけられており、ショタイデとなったイエにはその世帯主の名を屋号に用いたという。現在では、屋号が使われることはあまりなく、新しいショタイデに屋号がつけられることもなくなっている。

この章では、鍋谷のイエというものが、社会的・経済的側面からイエの全体において、そしてイエの中の個々の成員において、どのような機能を担っているのかということを述べる。

1.　イエ全体の機能

鍋谷において、イエ全体が社会的なひとつの単位として機能している場面としては、親戚づきあい、近所づきあい、区の活動といったものがあげられる。以下では、それぞれの場面でのイエのなす機能を述べる。

a　親戚づきあい

鍋谷のそれぞれのイエは、地域内にかなりの数のシンセキをもっている。鍋谷から鍋谷へ入

婿した70歳代のある男性は、婿入したときにシンセキの数を数えてみたら、鍋谷130軒のうち、キョウダイ、イトコ、マタイトコ、ヤイトコまでいれて40軒ほどもあったという。現在においても、70歳代の別の男性のシンセキは鍋谷90軒のうち20軒を数えるという。鍋谷において、シンセキと呼ばれる範囲は、キョウダイ、オジ、オバ、イトコというのが普通であるようだが人によってはマタイトコまでシンセキの範囲としていることがある。先に述べた、40軒もシンセキがあったという人も、実際にはイトコぐらいまでがシンセキであるといっている。また姻族もシンセキの範囲に含まれており、そのつきあいの上で父方・母方の区別はないという人もいる[7]。シンセキとして十分に認めうる範囲にあるけれども、イトコぐらいのつながりになると、親しくしている人としていない人との差が拡がってくるということで、さらにマタイトコぐらいのつながりとなると、かなり縁遠くなってしまうようである[8]。また、遠くに住んでいるということも、親戚づきあいが希薄となる一因になるとのことである[9]。

父方のシンセキというものは、一般的に地域内に集まる傾向があると言える。さらに鍋谷の場合には、地域内での通婚が一般的であったために、母方のシンセキも地域内に集まる傾向が強かったといえる。それゆえに、鍋谷内において、シンセキ間のネットワークがかなり密に拡がっていたと考えられる。しかし、現在ではショタイデを鍋谷内に構えるという者は少なく、鍋谷の外へ分出する者が増えており、また、配偶者を鍋谷の外から選ぶ傾向にあるということもあり、シンセキ間のネットワークが鍋谷の外へ拡大しているといえる。

親戚づきあいというものは、血縁や婚姻によるつながりをもつイエとイエとが互いに相手をシンセキと認め、その間に成り立つ交際のことをさす。鍋谷内において、現在親戚づきあいの場としてあげられるのは、結婚式・葬式・法事・盆・暮れ・正月・秋祭りなどである[10]。昔はシンセキの者が家を新築するようなときには、山から木を切り出す手伝いをするとか、田植えや稲刈りをシンセキどうしで互いに手助けするといった共同作業があったけれども、現在ではこのような経済生活における協力というものはほとんどなく、上述のような冠婚葬祭といった場ぐらいしかシンセキが集まる機会はない。すなわち現在では、冠婚葬祭のような、社会生活の上でシンセキを必要とする場面のみが、親戚づきあいの生じる場なのである。鍋谷のイエのシンセキ間のネットワークが鍋谷の外へ拡大している今、そのつきあいも疎になっているといえる。

b　近所づきあい

鍋谷の場合、地域内での婚姻が一般的であったため、隣近所のイエとは、どこかしらで親戚関係にあることが多いという[11]。また、シンセキとしてのつながりをもっていなくても、どのイエも何代も前から鍋谷に住んでいるわけで、昔から隣近所なのである。そのためキンジョのイエとイエはかなり親密なつきあいをしているようである。

キンジョと呼ばれうるものには、いくつかのレベルがある。向三軒両隣というイエを中心と

したカテゴリーもそのひとつであろうし、鍋谷区の中で垣内(カクチ)と呼ばれている小区もそのひとつであろう。ここではイエ中心のカテゴリーとしてのキンジョについて述べる。鍋谷でも向三軒両隣を普通キンジョと呼ぶが、そのイエの立地条件によって、キンジョと呼ばれるものの範囲が違っており、かならずしも、常に5軒のキンジョを持つというわけではない。

キンジョどうしの具体的なつきあいは、冠婚葬祭のような場でよくみられるが、日常生活でも、物の貸し借りとかお裾分けといったことがよくある[12)]。昔はキンジョで順番にもらい風呂をしたり、キンジョの人たちと連れだってナギ[13)]に行ったり、田植えや稲刈りの手伝いをキンジョのイエが互いにしたりといったつながりが強かったようであるが、現在では、それぞれのイエに風呂ができたり、田畑の機械化が進んだりしたために、このようなつながりは弱まっている。今でも、隣りあったイエどうしで共同して農機具を購入・管理している例はあるが、全体としては、日常生活における近所づきあいの意味は失われつつあるといえる。

現在の鍋谷では、冠婚葬祭のような社会的な場面で、近所づきあいの具体的な姿をみることが多い。その一例として、オンナヨバレというものがある。これは、そのイエに婚入してきた女性を、シンセキやキンジョの女性たちに紹介するために行なわれるものであり、女性たちの日常の生活を円滑にするという意味をもつ。現在のように、鍋谷のイエへ婚入してくる女性のすべてが、鍋谷の外の女性であるような状況の中では、このオンナヨバレという行事のもつ意味が、きわめて重要になってきているといえる。

キンジョというものは、地縁的つながりによるものであるから、互いにその土地を離れないかぎり存続するものである。これは、数世代たつとその関係が薄れてしまうシンセキとは全くちがう。この点で、鍋谷においてシンセキのネットワークは疎になりつつあるが、キンジョ間の関係は変わらず維持されていくといえるだろう。

c　区の活動

ここで述べることは、a、bで述べたようなイエとイエとのつながりとは異なり、鍋谷のそれぞれのイエが区の活動をとおして、どのように結合されており、その中でそれぞれのイエがどのように機能しているかということである。

鍋谷の場合、区というものは二種類ある。ひとつは90世帯全体としての鍋谷区であり、もうひとつは垣内と呼ばれる4つの小区である。鍋谷のイエはすべて、この重層的な区の組織に組みこまれており、しばしばこれは二重に機能している。

区の活動への参加の単位がイエであることは、万雑(マンゾウ)からもわかる。万雑はイエごとに割りあてられ、二夫婦が同居して一つのイエを構成しているとみなされる場合には別口とはならず一軒とみなされ、ショタイデを構えたときにはじめて別口となり、別の万雑を割りあてられることになる。また万雑は、重層的な区の組織がよくあらわれており、鍋谷区全体としての万雑と、垣内ごとの万雑というものが別個に存在し、二重万雑となっている。しかし、現在の鍋谷には、

4区を一本化しようという考えがあり、いくつかの面では鍋谷一本に統合されてもおり、この二重性は薄れつつあるといえる[14]。ここでは全体としての鍋谷区への各々のイエを単位とした活動についてみてみる。

区の活動への参加といっても、各々のイエが負う義務の強弱はその種類によって異なっている。万雑のように、そのイエの区における位置によってかなり強い義務をもって負わされるものや、祭りの志納金のように、それぞれのイエが自らどのくらいの金額は出さなければいけないと考えるようなものもあれば、忠霊塔、道路の側溝の清掃など、比較的弱い義務でしかないものもある。万雑割はそのイエの財政・資産についての評価によるところが大きく、万雑の多少はそのイエの鍋谷内での経済的位置に置きかわりうるものであり、また、祭りの志納金も、役員となっている成員がいるイエでは金額が大きく、そのイエの鍋谷内での社会的な関わりの深さを示しているといえる。この二つは社会的にそれぞれのイエに強い義務を負わせているものである。一方、清掃などは時間的余裕のある人々が参加すれば良いといった程度のものであり、区が各々のイエを統合している様子が現れる場ではない。

区の活動の主なる場として、鍋谷区役員会というものがある。これは、鍋谷内における諸事を取り決める役割を担っており、40人ぐらいで構成されている。その構成員はすべて男性で、40歳代から70歳代にかけての人々である。役員はひとつの世帯から一度に2人でるということはなく、世帯によっては父親と息子が交互に役員となることもある。これは役員となる男性成員がそのイエの代表という性格をもっているということである。しかし、すべてのイエから役員がでるわけではなく、役員はイエの代表としての性格以前に、個人的資質等によって選出されると考えたほうが良いと思う。同一世帯から複数の役員が出ないのは、イエの単位性がネガティブに表出していると考えることもできる。

全体として、社会的にひとつの単位となっているイエの機能は、農林業の希薄化にともないその経済的関係を維持する必然性が薄れたため、この面ではあまり働いていない。一方、社会的な面においては、上述のいずれの場合も効力をもって働いており、とくに区に関しては、社会的統合の単位としてのイエのもつ役割は今なお大きな意味をもっているといえる。

2　イエにおける個々の成員の機能

次に鍋谷におけるイエの各々の成員の機能・役割について考えてみる。鍋谷においてイエというものは、その経済生活の上でひとつの単位となっている。鍋谷のそれぞれのイエは過去において、農林業という同一の生業であったため関連するところもあったが、現在では、それぞれのイエが異なる生業についており、鍋谷という地区から独立した経済的単位となっているといえる。ここでは、鍋谷の一般的な家族タイプである直系家族の世帯をモデルとして、第1・2・3世代という区分を設け、それぞれの社会的・経済的役割について述べようと思う。

a　第1世代（祖父・祖母）

50歳代あたりからこの世代になりうるわけであるが、その年齢によってイエの中で負う役割がかなり違っている。

まず男性の場合について述べる。50～60歳ぐらいの人の場合は、就労していることが多く、イエにおける経済的な役割が大きいといえる。これ以上の年齢になると職を離れ、イエの田畑や山林の手入れといった仕事を主に担う人が多くなる。現在、農林業が経済的にイエに占める位置は決して高いものではない。田畑は、そのイエが消費する程度しか作付けされておらず、山林も子孫のために手入れをし残しておくという考えで維持されている。また、この世代の人は社会的な単位としてのイエの代表となることが多く、区の役員に選出されることも多い。シンセキやキンジョとのつきあいにおいても、イエの代表として参加する存在である。しかし、必ずしもこの世代の男性のみが、こういった社会的な面での代表となるわけではない。

次に、女性の場合について述べる。女性も男性と同様、50歳あたりからこの世代になりうるわけであるが、女性の場合50歳あたりから徐々に賃労働から離れ、イエの中の仕事をするという傾向がある[15]。おそらくこれは、孫が生まれたことにより、その世話のためにイエに入ったと考えられる。社会的な面では、男性のようにイエの代表となって区の役員となったりすることはないけれども、シンセキやキンジョとのつきあいにおいては大きな役割を担っている。但し、この場合、男性のほうが公的にイエの代表と目されることが多いので、男性がフォーマルなつきあいに大きな役割を担い、女性はインフォーマルなつきあいの上で大きな役割を担っているともいえよう。

ここで、この世代の者がいない世帯におけるその代替について少し述べる。まず山林の手入れといった作業は、鍋谷の山林組合がうけおってくれる。また、社会的なイエの代表としての性格などは、そのまま第2世代の者へ転換されることとなる。

この世代の人は、イエの中の年長者ということもあり、社会的な面ではイエの代表となることが多い。しかし、ある程度の年齢になるとその役回りをリタイアし、第2世代の者に譲っている。イエが代替わりする時期というものは、そのイエごとに異なっており、はっきりとした理念はない。面倒になったら息子に継がせるという話もあるが、大体60～70歳あたりとみてよいだろう[16]。また、65歳以上の人は男女とも老人会に入ることができる。老人会への参加は任意のものであり、誰しもがその活動にたずさわっているわけではない。その活動としては、地域内の草刈や清掃といったものがあり、これによって社会的に区の活動に参加しているともいえる。

b　第2世代（父・母）

20歳代後半から50歳あたりの人がこの世代にあたる。

男性の場合、この世代の者は全員就労しており、第1世代の男性成員とともに、イエの経済

を支えている存在といえる。社会的にイエの代表となりうるのは、40歳代以降と考えられる。これは区の役員に選出される年齢が40歳代からだということから推察したものであるが、イエの代表となることと、区の役員となることは、あくまでも別個のものであるし、また、第1世代・第2世代がともにこのような社会的な面でイエの代表となりうるような家族構成の世帯の場合には、それぞれの世帯ごとに代表となるものの世代が違っており、一概に言うことはできない。また、この世代の男性は壮年団に参加している場合が多い。壮年団は結婚してから50歳ぐらいまで参加するのが通例で、秋祭りなど区全体の行事の中心的存在となっているが、全員が積極的に参加しているわけでもないようである。

女性の場合も、この世代のほとんどの者が就労しているわけであるが、25～30歳ぐらいの人は職につかずに家事に専念する例が多い[17]。これは乳幼児の世話のために家庭にとどまっていると考えられる。これ以外の女性は、大体何らかの職についている。鍋谷においては、女性がイエの外へ出て働くことは当然とされている傾向があり、女性たちもそれを受け入れている。鍋谷の場合、昔から女性が男性とともに山林へ入って、主生業であった薪炭業の手伝いをしていたこともあり、女性の労働を家事のみとみなすことはないようである。女性が結婚前にすでに就労していることが多く、通勤可能であればそれを辞めさせてまでイエに入れさせることはないと考えられている。鍋谷の外から女性が婚入するようになったことも一因とみなすことができる。一人も知り合いのいない鍋谷の中にいるよりも、外に出て働いたほうが良いと考えられているのかもしれない。この世代の女性は婦人会に参加している場合が多い。婦人会も壮年団と同様に、結婚してから50歳ぐらいまで参加するのが通例である。主な区内での活動としては、盆踊りを催すことや、公民館の清掃、冠婚葬祭の衣装・祭具の斡旋などがあげられる。婦人会活動も、全員が積極的に活動に参加しているわけではないようである。

この世代の者は、経済的な面ではイエの中心的存在といえようが、社会的な面では必ずしも中心とはいえず、とくにシンセキやキンジョとのつきあいは、第1世代の者に負うところのほうが大きいようである。

c　第3世代（子供）

ここでの子供とは、鍋谷内に住んでいてまだ結婚していない人を差すもので、大体0～30歳ぐらいの範囲と考える。

まず、0～6歳の未就学の乳幼児・子供について述べる。この年齢の者は完全に親たちの保護のもとにある。祖母・母親は就労を辞めてまでその世話をしている。

次に、就学中の子供について述べる。高等教育の普及により、その範囲は7歳から18～22歳ぐらいとなっている。昔は小学生ぐらいになると、イエの中で農作業・山仕事・家事の手伝いといったかなりの義務を負っていたようであるが、現在では特別な役割をイエの中で担うということはほとんどない。これは子供の数が減少したことにより、親たちの保護が強くなった

こともあるだろう。昔は子供の中の年長者が乳幼児の面倒をみていたものであるが、現在では祖母・母親がすべてその世話をしている。

18～22歳ぐらいから30歳ぐらいまでの、就労している未婚の子供の場合について述べる。地区の活動への参加としては、青年団が組織されているけれども、あまり積極的な活動をしているとはいえず、秋祭りにおいても、昔の青年団ほど中心的な存在とはなっていないようである。また経済的にも、まだ第2世代の者が働いている場合が多く、この年齢の者は、経済的にも社会的にもイエの中心とはなっていない。

全体として、鍋谷におけるイエの中の個々の成員の役割は、子供の世代を除いて、本質的にはこの30年間で変化がないと考えられる。経済的・社会的な役割分担そのものには変化がなく、ただそれが機能する場が変化しただけなのである。その原因は、賃労働への就労、高等教育の普及、婚姻圏の拡大といった鍋谷をとりまく社会状況の変化にあるように思われる。

VI　お　わ　り　に

以上、鍋谷における世帯・家族について、形態・婚姻・機能の面から考えてみたわけであるが、いくつかの点で不十分な論の展開であったことはいなめない。

イエにはサイクルやヴァリエーションがあるということは述べたが、本稿ではそのことをあまり深く追求してはいない。鍋谷のイエが一般的に直系3世代同居であるといっても、それが常にその形態をとり続けるわけではなく、その移行期には2世代もしくは4世代という形態をなすはずである。本稿では、一般的タイプとしての直系3世代同居のイエを例にとっており、ひとつのイエがもちうる形態のサイクルについての考慮が欠けているため、形態が変化することでイエの機能がどう変化するかなどということを論ずることがなかった。また、イエのヴァリエーションに関していえば、イエの形態が違えばその機能もおのずと違った様相を呈するはずであるのに、本稿では一般的なタイプでしかない直系3世代同居のイエの例だけで、イエの機能面を論じている。

また婚姻に関していえば、女性の婚入のみ大きくとりあげて、他の面に関しては若干説明不足であったかもしれない。とくに、鍋谷の女性の婚出については、その婚入と同レベルぐらいに扱えれば良かったのだが、データーが足りずできなかった。

こういった不備な点を補いつつ、鍋谷の世帯・家族をより総合的に見ることが、今後の課題である。

注)

1) 後口、1957。

2) 鍋谷では分家のことを、ショタイデもしくはショッテデという。

3) 73歳のある男性は「世間が広がるからいいのでは」と言っている。

4) 60歳のある男性の話。

5) 69歳のある男性の話。

6) タワラモン(俵紋)ともいう。同名のものを区別するために藩政時代につくられたもので、上納米の俵に書いたためにタワラモンという。後口、1957 : PP. 68 ～ 69。

7) 65歳のある男性の話。

8) 48歳のある女性の話。

9) 72歳のある女性は、「遠くのほうにいる親戚とはほとんどつきあいがない。鍋谷にいる親戚とは日常的につきあっている。」と話している。

10) 65歳のある男性は、「県内や県外にいるシンセキは、盆・暮れ・墓参りには帰ってくるし、子供の結婚式や法事・葬式には呼ぶ。」と言っている。

11) あるインフォーマントの場合、隣りのイエとイトコどうしである。

12) 72歳のある女性の話。

13) 杉の木を伐採した後、杉の枝葉を焼き、そこに大根、アズキ、ソバなどを作ることをいう。

14) 秋祭りの獅子舞いなど。また上水道も近々一本化されるという話である。

15) 才田論文を参照のこと。

16) 69歳のある男性の話。

17) 才田論文を参照のこと。